
Pure Blood Lovers

オデキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pure Blood Lovers

【Nコード】

N52010

【作者名】

オデキ

【あらすじ】

僕の住む街で今、『何か』が起こっている。

一カ月足らずの間に六人も犠牲を出している通り魔事件。異常なその事件をさらに異常たらしめているある要素。

街を異常が包む中、僕は一人の『吸血鬼』と出会う。

それは、僕の人生を変えてしまうような『何か』だった。

これは、僕と彼女の物語。

純血と、純愛の物語だ。

第一章 プロローグ（前書き）

初めまして。初投稿と云うことで拙い部分もありますが、読んでいただければ幸いです。

第一章 プロローグ

人生は坂道だ。

大抵の人間はただただなだらかな坂を下っていく。途中で止まったり振り向いたり、あるいはつまづいて転んだりしながらも平凡な道を下っていく。

だけど、人生に数回だけ、大きな転機を迎える。

それは長い上り坂のような苦しい生活の始まりかもしれないし、踏み外したら命を落とすような崖っぷちかもしれない。

失敗だったり、別れだったり、あるいはこの先の道がずっと華やいて見えるような最高の出会いかもしれない。あるいはそれは、残りの人生をかけてしまうような『恋』かもしれない。

それが何かは分からないけれど、それでも人は、人生が変わってしまうような『何か』に出会う。

15歳の秋。僕はそれに出会った。

僕の人生において二度目であるそれは、一度目のそれよりもずっと劇的で、鮮烈だった。

これは、僕と彼女の物語。

純血と、純愛の物語だ。

一 『事件』

けたたましい目覚まし時計の音で目を覚ます。

布団から這い出て台所に向かい、食パンをトースターで焼く。

いつも通りの朝だ。毎日毎日変わらない、習慣化された朝。部屋の端に寄せてあるちゃぶ台を運び、その前に座るのも、いつも通り。コップに注いだ牛乳をチビチビ飲んでいる内に、トースターがチン、と音を鳴らした。重い腰を上げて、台所のトースターから食パンを取り出して皿に載せた。冷蔵庫からはマーガリンを取り出す。いつも通りの味気ない朝食を取りながら、テレビの電源をつける。何もかもがいつも通り。

変わらない。何も。

ただ一つ、いつもと違うことがある。

テレビから流れるニュースの音声の不穏なキーワードを告げている。

『連続通り魔殺人事件』、『被害者は皆、全身の…を抜かれており、』、『未だ捜査の……は』

僕の住む街で、『何か』が起こっている。

九土北高校は九土市一の進学校であり、同時に僕の通う学校でもある。市内一などと言ってもそんなものはたかが知れている。言ってしまうと、ごく普通の高校である。

そうだ。結局は普通である。それで良いのだ。人生を変えてしまふような劇的な出来事など、二度も体験する必要はない。

「おい井伏、なに黄^{いふせ}昏てんだよ。」 人が物思いにふけっている

というのに空気を読まずに話しかけてきたこの男は、日野常彦。ひのつねひこ

高校生らしからぬ無精髭を生やした、無神経で無遠慮、その上い
つも無一文と言わないない尽くしの男である。

「何か今、物凄く失礼なこと考えてなかったか？」

「いや、そんなことはないよ。愛すべき友人が今日も変わらず元気
なのを確認して安堵してただけさ」

「なんだそりゃ」

日野はわざとらしくため息をついて、それからケラケラと笑った。
日野とは入学当初からの付き合いである。如何にも軽薄な男だが、
これでなかなか良いところもある、僕の友人だ。

「なあ、今朝のニュース見たか？また被害者が出たらしいぜ」

日野が大袈裟に声を潜めて言う。

「……一体何のことだい？全くこれっぽっちも心当たりがないんだ
が」

「おいおい、そりゃねえだろ。九土市に住んであの『事件』のこ
と知らないなんて、そんなこと有り得ないぜ」

「それはお前の主観の話だろう。九土市に何人の人間が住んでると
思ってるんだ。一人や二人、その事件とやらを知らなくてもおかし
くはないさ。そんなことより、いい加減髭を剃れ」

「うるせえ！これは俺のトレードマークなんだよ！」

ギアアギアと喚く日野の声は完全に無視して、僕は再び意識を
思考の海に落とす。

『事件』。さっきはああ言ったがそれが具体的に何の事件を指す
のかは、例えば九土市に住んでいない者でも、知らない者はいないだ
ろう。

『連続通り魔殺人事件』。一ヶ月ほど前から九土市で起きている
一つの事件。この短期間に六人も死者を出しておいて犯人が全く
捕まる様子がないとくればそれだけで恐怖に値する、異常な事件で
はあるが、だがそれ以上にこの事件を異常たらしめている要因があ
った。あるいは他の異常な要素を全て塗りつぶしてしまうほどの異

常。吐き気を催す程の異常。

被害者達は、すべからく、全身の血を抜かれていた。

午前の授業の終わりを告げるベルが鳴ると、皆思い思いに動き出す。

日野はといえば、一時間目の授業が始まってすぐに眠りについたまま未だ目を覚ましていない。はつきり言って異常である。

幸せそうな顔で眠る日野を放って購買に向かう。

いつもなら優しくぶん殴って起こしてやる所だが、今日はやめておく。朝の話題を蒸し返されては困るからだ。食事中に聞いて、あまり気持ちの良い話ではない。

購買につくと、見知った顔があった。

「お、九ちゃん。ちわっす！」

「相変わらず早いな、八坂。僕も授業が終わってすぐに来たのに」

八坂弥栄は僕と同じ一年D組に所属する女子生徒だ。

「全力ダッシュで来たからね！。おかげで焼きそばパンを無事購入できたよ！」

「そうかい。そりゃ良かった」

「九ちゃんも急いで買ってきた方がいいよっ！早くしないと売り切れちゃうぞ」

「ああ。そうするよ」

八坂の忠告通り、小走りでパンの売り場に向かう。

ちなみに「九ちゃん」というのは僕のあだ名である。（最も僕をそんな風と呼ぶのは八坂だけだが）

別に毛が三本のおばけやマラソン選手に似ていると言っわけなく、単純に「九助」と言う僕の名前から来ているらしい。

首尾良くコロッケパンと焼きそばパンを購入した後、教室に戻ることにした。

人がまばらになった教室内で、コロッケパンの袋を開ける。

日野はグースカと気持ちよさそうに眠っている。

僕の日常は未だ平穏だ。

二 『夜と吸血鬼』

一日の授業を終えて帰宅し、夕食もとって終えた頃、牛乳を切らしていたことを思い出した。

今からではスーパーは開いていない。迷った末、コンビニに向かうことにした。いつもより出費がかさむが、仕方ないだろう。

ボロアパートから十分ほど歩いて、コンビニにたどり着く。入ってすぐの雑誌コーナーに、気になる見出しがあった。

『連続通り魔事件の裏には吸血鬼が！？』

雑誌を手に取ってパラパラとめくる。何でも被害者達は血を抜かれただけでなく、その首筋には牙のような跡があったと言う。その他にも、信憑性があるのかも疑わしい事件の裏事情とやらが書き連ねてあった。

くだらない。僕には関係のないことだ。

牛乳を購入して店を出る。辺りはすっかり暗かった。

少しだけ、昔のことを思い出す。僕がまだ、平穏を嫌っていた頃。人生に、特別な『何か』を求めていた頃。

あの頃の僕はあまりに無邪気で、あまりに無力で。あまりに臆病で、あまりに無知だった。

あの頃の僕がいつも心待ちにしていた『何か』は、僕が想像しえない程の最悪として訪れた。

僕は人生の意味を知って。平穏の価値を知った。

バサリ、と音がした。

視界の端に黒い何かを捉える。

「…コウモリ？」

コウモリなんてそう見かけるものじゃない。それにこんな風に人の近くを飛ぶものなのか。

もう一度、目を凝らして確かめよう。

動かした視界の先で、コウモリは

ニタリと笑った。

「なんだよ…アレはっ…」

一目散に駆け出す。アパートとは逆方向だ。今はただ、アレから逃れたかった。

（コウモリが笑う…？そんなことは、有り得ない）

仮にコウモリにわかりやすい表情なんてものが存在するとして、それを僕に判別できるわけではない。

それでも、確信できる。

『奴』は笑っていた。

探し物を見つけたように。十年来の友達と再開したように。

不気味に、不穏に、喜びに震えていた。

「ご機嫌よう」

どこからか、声が生じた。

立ち止まり、振り返る。

そこには一匹のコウモリがいた。先刻と同じように、不気味な笑みを浮かべながら。

ただ一つ、明らかに違うことがある。目の前の『ソレ』は、その背に闇を背負っていた。夜の暗闇の中にあって尚、どうしようもなく暗い闇。

黒い靄のようにも見えるそれは、コウモリを包み込みながらゆっ

くりと形を為していく。

『ソレ』は人の形をしていて。だけどどうしようもなく人からかけ離れていた。

「そう怖がるなよ。少年」

『ソレ』は静かに言葉を紡ぐ。あまりに穏やかで、あまりに平穏な声を。

後ろに撫でつけた髪はどこまでも深く黒く、肌の異様な青白さを際立たせる。その痩身を包むのは漆黒のタキシード。

「自己紹介を、した方がいいかな？」

ニタリと笑った口から覗くのは、鋭く尖った二本の牙。

「私の名はツエペシュ」

不気味な笑みをさらに深くしながら、『ソレ』は言った
「いわゆる、『吸血鬼』だ」

僕の平穏な日常は、終わりを告げた。

三 『出会い』

ツエペシュと名乗った目の前のモノは、姿だけを見るなら普通の人間と大差ない。

しかし、明らかに違う。

ただそこに在るだけで異質さが、異常が、にじみ出ている。

「安心したまえ。君の方は自己紹介などいららないよ。私の目的に、それは必要ではない」

目的。こいつの目的は。思い出されるのは、ついさっき見た雑誌の見出し。

『吸血鬼』『連続通り魔事件』『血が抜かれていた』

考えずともわかりきっている。こいつの態度を見ていればそれが間違いでないことは明らかだ。

こいつは目の前の存在を見下している。当たり前だ。こいつにとって僕は、ただの捕食の対象でしかないのだ。

「Sorry・少し怖がらしてしまったかな？」

「……少しなんてものじゃないさ」

「ほう。思ったより冷静だね」

冷静なものか。心臓はとんでもない速度で脈打っているし、背中には嫌な汗をかいている。

それでも。それでも、言葉がつうつじるなら。意志の疎通が出来るなら、状況は最悪じゃない。

「ふむ。色々と考えを巡らしているようだね。この状況から逃れる方法でも考えているのかな」

ツエペシュは、ニタリと笑う。

「Good・悪くないよ、少年。考えるという行為は君たち人間に与えられた特権の一つだ。無論それは、吸血鬼われわれにも与えられた権利だが」

考える。こいつから逃れる方法を。この状況を打開する何かを。

「…目的って言ったね。あんたの目的って言うのは…」

「わかりきっていることを聞かれるのはあまり好きじゃないな」
ツエペシユの背中から、闇が溢れ出す。

「無論、君の血が欲しいのさ」

闇が、形を変える。

現れたのは、巨大な鉄杭。鈍く輝くそれは、槍のようにも見える。
その数を五本にまで増やした鉄杭が、一斉に飛び出す。

恐ろしい速度で僕へと迫って来る。

僕は、その場から一步も動かない。

「……っ」

鉄杭は僕の目の前で、その動きを止めていた。

「おやおやこれは。恐怖で動けなかったかな？」

ツエペシユが馬鹿にしたように言う。

「…動けなかったわけじゃない。僕には杭が僕の体を貫くことがないとわかっていただけのことだ」

「ほう。それはまたどうして」

「この街で起きている通り魔事件。その犠牲になった人たちにその杭で貫かれたようなデカイ穴があったなら、まずそっちが噂になるだろう」

とは言うものの、別にこの考えに百パーセント自信があったわけじゃない。半分は『動けなかった』と言った方が正しいのだが。

「くっ…ふはははは！」

暗闇にツエペシユの笑いが響く。

「Great! 素晴らしい! 最高だよ、君は。今まで会った人間の中で一番だ」

「そいつはどうも。全く嬉しくないけどね」

「くっ、そう言うなよ、少年」

いや、と続けて言う。

「少年と言うのはあんまりだな。特別に名前を聞いてあげよう。自己紹介してご覧」

「井伏九助」

思わず素直に名前を言ってしまった。

「ふむ、そうか。ではイブセ君。特別に教えてあげよう。君を串刺しにしなかったわけを」

ツエペシユは楽しそうに言う。

「さつきも言った通り、私の目的はあくまで血だ。君たちには余計な血を流してほしくない。だからこそ私は脅しこそすれ、血を吸う以外の方法で人間を傷つけることはしないんだ。紳士的だろう？」
「なにが紳士的だ。それはつまり、これから僕の血を吸い尽くして殺すってことじゃないか。状況は何一つ好転していない。」

「さて、楽しいお喋りの時間は早々に切り上げるとしようか」

ツエペシユは笑う。

「今は食事の時間だからね」

そして、ゆつくりと歩み寄ってくる。

駄目だ。こいつからは、逃げられない。

一歩も動けない僕との距離を、目の前の吸血鬼は少しずつ縮める。

（もう、終わりだー）

僕が確信した、その瞬間。ツエペシユの体が吹き飛んだ。

「……は？」

目の前には一つの影。ツエペシユではない。もっと滑らかな、少女の影だ。

月光を浴びて輝くのは背中を覆うほどに長い金色の髪。その身体は黒いドレスに包まれている。

少女が、顔を向けてこちらを一瞥する。

「……」

思わず、息を呑んだ。

少女はまるで人形のようにだった。そう称するしかないほどに、ただただ美しい。

この世のものとは思えないほどに完成されたその中に、さらに異質なものがあつた。

瞳だ。少女の瞳は、まるで鮮血のように真っ赤に輝いている。

「お前は……」

少女は何かを言おうとして、途中で思い直したように口を閉じた。
少女の声は美しかった。

その日、僕は。人生が変わるような出会いをした。
暗闇の中で少女だけが、月より眩しく輝いていた。

四 『いただきます』

少女の背中に話し掛ける。

「き、君は一体…」

「黙っている」

「うわあっ！」

思いっきり蹴り飛ばされた。

空中で体が一回転した。十メートルくらい飛ばされた。

「いつ…てえ…」

なんて無茶をするんだ。

倒れ込んだまま彼女の方を見ると、僕とは逆の方向、ツエペシュが吹き飛んだ方へと駆け出している。

しかし、彼女が駆ける方向にツエペシュはいない。

「上だ！」

彼女の頭上、そこに生まれた闇がツエペシュへと変じていた。

立ち止まった彼女がツエペシュを見る。そして、右手を挙げた。

掲げた手がぐにやりと歪む。

次の瞬間、彼女の手の中に光が生じていた。否、光ではない。月

光を反射するそれは、長大な剣だった。

落下するツエペシュの身体に剣が突き刺さる。

ツエペシュの身体が、ほどけた。

暗闇に溶け込んでいく。

（なんだ…？やったのか？）

いや、違う。彼女の周りをおびただしい数のコウモリが飛んでいる。

恐らくあれはツエペシュだ。最初に僕に姿を見せた時のようにコウモリへ姿を変えたのだ。数が増えたところで、いまさら驚いたりはない。

彼女は長剣を片手で振り回しながら後退してくる。

「おい、いつまで寝ている！早く立て」

「あ、ああ」

少女に言われて慌てて立ち上がる。彼女は、もうすぐ近くまで下がってきている。

「チツ…鬱陶しい」

そう言つと少女はコウモリ達を払うように左腕を振るつた。

生じるのは炎。まるで蛇のように自在に動いてコウモリ達へと向かう。

「クヒツ…ハハハハハ！やるねえお嬢さん！」

炎に焼かれながらもコウモリが人の姿を形作る。

「流石は『純血』^{エニアブラム}と言つた所かね」

再び人の姿に戻つたツエペシュの周りには数本の鉄杭が浮かんでいる。

「Bad・しかし！だからこそ喰らう甲斐があるというもの」

鉄杭が少女に狙いを定める。

「ヒハハツ！串刺しだあつ！」

鉄杭が飛ぶ。

少女はそれを、炎を収めた左腕で文字通りなぎ払つた。

「無駄だ」

鉄杭は全て、一瞬でかき消された。

「チイツ…まだまだ私の力は及ばないようだね」

ツエペシュが不適に笑つた。

「ここは退くでしょう。ただし」

笑みを深める。

「『それ』を頂いてからだ」

ツエペシュの姿が消えた。

そして、現れる。

「…は？」

僕の後ろへと。

「Good bye・イブセ君。お別れだ」

「くっ…やめろお！」

少女が叫ぶ。

「いただきます」

ツエペシュが言つて、口を大きく開く。そして。
僕的首筋へ噛み付いた。

五 『夜は巡りて』

「あ…あぁ…」

体から力が抜ける。体の温度を奪われるような異様な感覚。

「やめろっ…！」

ツエペシユの体が僕から離れた。

少女がツエペシユを殴り飛ばしたらしい。

力が入らない。そのまま地面に倒れ込む。

少女が僕の体を抱える。何かを言っている。

分からない。何も。

目を覚ますとコンクリートの天井が見えた。

「何処だ…ここ」

起き上がって周りを見渡す。どうやら何かの廃墟らしい。

「目が覚めたか」

声の方向を見る。少女がいた。

そうだ。僕は。吸血鬼に血を

「君が、助けてくれたのか」

「フン、あと数秒遅かったら死んでいる所だったな。せいぜい感謝しろよ」

言いながら僕の横に座り込む。

「えっと、まずはありがと。色々聞きたいことがあるんだけど

…」

相当に困惑している状況なのだが、黙っていても埒が開かないだろう。

「貴様の質問に答える義務は全くないが、まあ聞くだけならタダだ。好きにしろ」

返答は、辛辣。

「あいつは、ツエペシユはどうなったんだ？」

「…奴は、始末した」

始末した。あっさりと言ってくれる。

ていうか答える義務はない、とか言いつつ普通に答えてくれるんだな。

「つまり、もう通り魔事件が起こることはないんだな」

「いや、お前の言う事件が何を指すかは知らないが、奴の食事の犠牲者のことを言っているなら、まだ続くぞ」

「…どうということだよ」

問うと、少しばつが悪そうに少女は答えた。

「仕留めた、とは言ったがな。恐らくあれは本体ではない」

「本体…？あれは分身か何かだって言うのか」

「奴がコウモリの姿に変わる所はお前も見ただろう。あれは吸血鬼の持つ『変化』の能力だ。己の身体を別の何かに変じさせる。その延長として、身体の一部を使って分身を生み出したのだろう」

なんて常識外れな話だ。それをこうもあっさりと言ってくれるのだから笑えてくる。いや、実際に笑ったりはしないが。

「でも、ちよつと待てよ。なんであれが分身だなんて言えるんだ。見ただけで分かるものなのか？」

「私は以前にもあれと対峙したことがある。昨日戦った奴は、あまりに弱すぎるんだよ」

様子を見ていて、ツエペシユと彼女に面識があるのはまあ予測できていたので、驚かない。

だが、ちよつと待て。

「…昨日？」

廃墟の窓から外を見る。

「あの、どう見ても今は夜なんだけど…」

「ああ、丸一日眠っていたんだ、お前は」

おいおい。なんの冗談だそれは。行方不明だなんて騒ぎになったりしないだろうな。

「…はあ。まあ、なるようにしかならないか。それで、また聞いたんだけど」

「なんだ」

あつさりと返答する。さっきの物言いは何だったのだろうか。案外、素直じゃないだけなのかもしれない。

「どうして、僕を助けてくれたんだ？」

少女は少し黙って、それから口を開いた。

「あれの狙いは、もともと私だ。巻き添えで人が死ぬのは気分が悪い。それだけだ」

「…そうか」

やはり、彼女は素直ではないのだろう。彼女が僕を救ってくれたのは純粋な優しさのように思えた。

「最後に、君のことについて聞きたいんだけど」

命を救ってもらった身分なのだから、本来始めに聞くべきだったのだろう。

「…私の名は、リリン。リリン・ブランディオだ。」

彼女が答える。

そして僕は、決定的な問いをぶつける。彼女についての質問を最後にした理由。

「君は、吸血鬼なのか？」

六 『帰還』

小鳥がさえずる、気持ちの良い朝である。

僕は今、学校に向かう途中だ。

「なんだかなあ……」

あんなことがあったと言うのに、まるで緊張感がない状況だとは思う。

あれから自分の住むボロアパートに帰った後、一眠りして今の状況にあるというわけだ（幸いあの廃墟はアパートからそう遠くない場所にあった）。

眠ったと言っても実際は色々と考え込んでしまい大した睡眠はとれていない。

目が覚めた時間もいつもより早かった。目覚ましを必要としない目覚めは久方ぶりである。

なんというか、とてもベストコンディションとは言い難い。

「朝食も牛乳一杯で済ませちゃったしな……」

はあ、とため息をつく。

思いきりタツクルされた。

「ぐえ……」

「九ちゃんの馬鹿！」

開口一番罵声をぶつけてくれたのは愛すべきクラスメイト、八坂弥栄である。

「いや、馬鹿って突然酷くないか。今のタツクルでヒキガエルみたいな声出しちゃったし……」

「馬鹿は馬鹿だよ！このバカチンが！心配かけてもう」

何を大げさな。

とは言えないか。あんな物騒な事件が起きている真っ最中である。一日無断欠席するだけでも「何かがあったのでは」と思わせるのに充分だ。「ごめん。悪かったよ。何て言うか、色々あってさ」

「もう…本当に心配したんだよ。私だけじゃなくてみんな心配してた」

みんなと言うのは大袈裟な気がするが。自慢じゃないが僕はそんなに友人が多い方ではないのだ。

「まあ、無事だったんだし良いけどさ」

八坂はそれっきり黙ってしまう。

「…何があつたかとか聞かないんだな」

「本当は聞きたいよ。言いたい文句もいっぱいある。いい加減携帯電話くらい持つて欲しいとかさ」

でも、と続ける。

「『何か』があつたんなら、仕方ないじゃんか」

「…そうか」

そうだ。八坂はこういう人間なのだ。

お節介焼きで心配性でいて、踏み入れられたくない所には踏み入れない。人の心の機微に敏感なのだろう。

こんな出来た友人に心配をかけてしまうとは。

「もう大丈夫だから。面倒なことにはもう関わることはないよ」

安心させるように言う。

嘘ではない。本当のことだ。

異常で異質な非日常など、一晩で充分である。

学校に着くとすぐに、日野の質問責めにあつた。

八坂とは違って、空気の読めない男である。その上、ちょっと引くぐらい僕のことを心配していて、正直気持ち悪かった。

「マキちゃんが職員室に来るようになって言ってたよ」

昼休みのことである。購買から帰ったところで八坂に言われた。

ちなみにマキちゃんとは僕らのクラスの担任教師、真希島先生の

ことだ。

「ああ、分かった。後で行くよ」

まず間違いない、昨日の無断欠席についてだろう。少し気が重いものの、パンを租借しながら言い訳を考える。

新製品のサバパンは不味かった。

適当な利用で真希島先生の追求をかわした帰り。

僕の横には八坂がいた。

「家に帰るまでは私が見張ってるからね」
だそうだ。

朝の会話と比べると踏み込みすぎな気もするが、実際下校を共にしたところで困ることはない。ひよっとしたらそこまで分かっている共に下校することを申し出たのかもしれない。

八坂は登校も下校もやたらと早いから知らなかったのだが、彼女の家は僕の住むアパートと同じ方向にあるらしい。朝に出会ったのもそのためだ。

他愛もない会話を八坂と交わす。

改めて思う。これこそが平穏だ。これが日常なのだ。

失わないと決めたものを噛み締めながら、僕は帰路についた。

七 『考えて考えて』

夜。布団の中で。

天井を見つめながら考える。

あの廃墟で、僕が口にしたひとつの質問。

『君は、吸血鬼なのか？』

彼女の答えはあまりに単純で。

『ああ』

肯定した。規定事項のように。当然に。顔色ひとつ変えずに。考えてみる。もしも僕が同じような質問をされたら。

『あなたは人間ですか？』

やめた。馬鹿げている。

僕に、そんなふざけた質問を受ける機会などあるわけもない。考えるだけ無駄だ。

彼女は。リリンと名乗った少女は、肯定の後にこう続けた。

『だから、もう関わるな』

だから。だから、何だと言っのだろう。

「言われなくとも、分かってるさ」 そうだ。彼女は吸血鬼だ。だから、関わらない。

僕は異常を許容しない。そう決めている。ずっと昔に、そう決めたのだ。

「だけど、何だろうなあ……」

違和感が、あるのだ。

「もう、やめよう」

考えるのをやめる。

それでいい。これ以上踏み込む必要はない。

僕はいつも通りの日常に戻ったのだ。あとは、せいぜい夜は歩かないよう気をつけて、普通に暮らせば良い。

「そっだろう？リリン」

言ってから、もう一度口の中でその名前を転がす。
リリン。その響きは、不思議と心地良かった。

「何かあったのか？」

「うん？」

日野の顔を見返す。

「何だよ、急に」

サバパンを口にしながら日野は言う。

「いや、なんかさ。今日はいつも以上に暗いからよ。何かあったのかと思ったんだけどよ」

「…悪かったな。いつも暗くて」

「怒んなよ。だっていつも難しい顔してんじゃんお前」
ヘラヘラしながら言う。

「お前は、いつも簡単な顔してるよな」

「うるせえ！どんな顔だよ、簡単な顔って」

日野はハア、とため息をついた。

「まあ、何もないなら良いんだけどよ」

それから、もう一度サバパンを口に運んでから「マズいな、これ」と笑った。

昨日教えてやっただろうが。

その日、変わったことがあったとすれば、そのくらいである。
他にあるとすれば、昨日と同じく八坂と一緒に帰宅したことくらいだろうか。

いや。もうひとつあった。これも日野絡みである。

帰り際、八坂と一緒に教室を出る僕に、日野が言った。

「もう少し、馬鹿になっても良いんじゃないの」
その言葉の意味を、僕は考えなかった。

考える。昨夜布団の中で感じた違和感について。
そして、思い当たる。

あの時。リリンに救われ、廃墟で目を覚まして。言葉を交わした
あの時。

僕は、何を考えた？

質問するまでもなく確信していたはずだった。彼女の正体について。
彼女が吸血鬼だという事実を。

「なのに、僕は」

彼女のことを。素直じゃないなどと。優しさ故に僕を救ってくれたのだと。

そんな風に思っていた。

まるで、僕らしくない。

吸血鬼などという化け物を。ほとんど無意識に信頼していたのだ。
何故だ。なんで。分からない。考えろ。
頭が、ズキリと痛んだ。

八 『選択』

「うっ…寒…」

秋も終わりに近づき、この所夜になるとびきり冷たい風がふくようになった。

そう。今は夜である。

そして僕が立っているのは荒廃した廃墟の前だ。

二階建てで、元々何に使われていたかは定かではない。

吸血鬼ツェペシュに襲われた僕は、ここで目を覚ました。

この場所だけが手掛かりだ。僕が、吸血鬼を知るための。

考えた。考えて、考えて、それでも分からなかったから。だから、知ろうと思った。

それは、まるで僕らしくない選択だけれど。それでも、何も分かんずにいるよりはマシなはずだ。きっと。

周りに警戒しながら（警戒したところで、それ以上がある訳ではないが）廃墟に足を踏み入れる。

少女はそこにいた。

髪の色は金色。その身を包むのは漆黒のドレス。

「…リリン」

短く少女の名を呟く。

一歩ずつ近づいていく。

少女はコンクリートの地面に横たわったまま動かない。

その傍らにたどり着いた。

「リリン」

今度は呼びかける意味で、その名を口にする。

「……」

少女は返事をしない。

（眠っているのか？）

吸血鬼の睡眠は日中に行われるものと思い込んでいたが、どうや

らそうではないらしい。

そつと彼女の寝顔を覗き込む。

「…おい」

違う。彼女は呑気に眠っているわけではなかった。

覗き込んだ彼女の顔は、苦痛に歪んでいる。

そこにきて、初めて気付く。彼女のドレスが、黒一色ではないことに。

混じるのは、赤。黒の中で一層引き立つそれは、紛れもない血の色だった。

「お、おい！どうしたんだよ…一体何が…」

それは余りに愚かな問いだ。何があつたかなど決まっている。

やられたのだ。ツエペシュに。

彼女とツエペシュの闘いを見ていたせいかもしれない。あるいは、彼女の姿に確固たる強さを感じた為か。

僕は、完全に信じきっていたのだ。

例え勝てなくとも、彼女が負けることはない。

馬鹿げた考えだ。彼女は言っていたじゃないか。あれはあくまで奴の分身に過ぎないと。

「くそつ…畜生…」

口の中で悪態をつく。それが何に対してなのかは、自分でも分からない。

「どうする…どうすればいい」

吸血鬼について知ろうと決意して。自分の身が危険に晒されることは覚悟していた。

しかしそれでも。彼女と、リリンと接触出来たなら、ある程度の安全は確保できるものと思っていた。リリンは、鬼ごっここの鬼なのだと思っていた。

そのリリンは今、傷だらけで汚い地面に横たわっている。

「僕は…どうすればいい」

考えずとも決まっている。

最低限の安全さえ確保出来ない以上、ツエペシュを止める手段が失われた以上は、どうあってもこれ以上踏み込むべきではない。

「そうだ。そうだよな」

この場から立ち去れば良い。ここで見たものを忘れて、決意を捨てて、立ち去れば良い。

「分かってる。分かってるさ」

でも、彼女はどうなる？

死んでは、いない。吸血鬼ならあるいは、人間以上の再生力を有していてこんな傷から立ち直れるのかもしれない。だけど、このまま死んでしまうかもしれない。あるいはツエペシュに見つかってトドメをさされるかもしれない。

彼女の命にはひとつも保証がない。

「分かってるんだ…分かってる」

僕に、何が出来るといえるのか。

早く立ち去れ。もしかしたら、すぐにでもツエペシュがここを嗅ぎ当てるかもしれない。

いつも通りの日常に戻るんだ。それが望みだったじゃないか。

「分かってるよ、畜生！」

彼女の体を抱きかかえる。ぞっとするほど軽い。

「とりあえず、僕の家運ぶしかないか」

分かっているさ。彼女を見捨てることなんか出来ない。僕を救ってくれた彼女を。

彼女を抱えたまま、廃墟を出た。

九 『想うコト』

目の前で眠る少女を見る。

血で濡れたドレスを脱がしたり、包帯を巻いたりと慣れない作業に苦戦したのだが、その間リリンが目覚めることはなかった。

「とりあえずは大丈夫、なのかな……」

依然眠ったままとはいえ、彼女の表情は大分落ち着いている。小さな寝息も聞こえていた。

まあ、包帯を巻いただけで急激に回復するわけもなく。彼女自身の回復力によるものだとは思うが。

彼女を救おうと、そう思い動いた甲斐はあったのだろうか。だけどそれに、何の価値があるのだろうか。

「僕は、平穏な日常を愛してる」

声に出して確認する。紛れもない事実だ。

その筈なのだ。

「その筈なのに、なんで」

なんで、こんな状況になってるんだ。

あの日から僕は変わった。それは間違いようがない。なのに。なのに僕は。

これじゃあまるで、昔の僕のようにじゃないか。

「」

言葉さえ湧かない。

なんでここにいるんだろう。

どうして。どうして僕は。

「どうして、生きてるんだろうな。僕は」

言葉は闇に溶けてゆく。

少女はまだ、目を覚まさない。

「汚い部屋だな」

それが、ようやく目覚めたリリンの第一声だった。

「悪かったね、そりゃ」

リリンはふむ、と尊大に頷いた後に続けた。

「で、ここはどこだ。どうしてお前が居る」

「どうしても何も。ここは僕の部屋だよ。だからここに居る」

「いや、そういうことではない。確かに質問をしたにはしたが、別にまともな答えを期待した訳ではないよ」

「だったら何を…」

「わからんか」

短い声の響き。だけどそこには、確かな圧迫感のようなものを感じる。

「私は確かに言っただはずだ。『関わるな』と、そう、な」

思わず気圧される。

「そうは言っても、偶然と言っべきかなんと言っべきか、傷だらけの君を見つけてしまったから。そんなものを見て、放っていくなんてことは、出来ないよ」

いや、実際は偶然でもなんでもないが。この際、そんなことは些事だろう。

「馬鹿馬鹿しいな。人間風情が調子に乗るなよ。放って置けないからといって、貴様に何が出来ると言っんだ。実際貴様は何をした」

「いや、それは…」

言葉に詰まる。確かに彼女に何をしてやれた訳でもない。僕がしたことと言えば

「服を脱がして、包帯を巻いたり…」

「…何？」

そう言っ、彼女は自分の身体をまじまじと見つめる。先程言った通り、彼女は今ドレスを着ていない。と言うか、服を着ていない。

包帯の上からそのまま服を着せてしまっていていいのか、判断がつかなかったのだ。

リリンの顔がみるみる赤くなっていく。

「いやいや、ちょっと待ってくれ。目覚めた時に気付くたる普通」

思わずツツコミをいれるが、彼女の耳には入らないようだ。

真っ赤な顔のリリンがこちらを見つめてくる。心なしか、瞳が潤んでいる気がする。

「い、いやまで。お前、ぬ、脱がした、だと？それは、あの、つまりだな」

ちよつと待て。本当に待て。

なんだよこのリアクションは。ついさっきまで傲岸不遜って感じでさ。雰囲気だって如何にもシリアスだったじゃないか。何をそんな年頃の娘みたいなの。いや、見た目的には間違っていないけどさ。

「そ、それは、だな。貴様、あの…」

最後には、かすれた声で。

「…み、見たのか？」

「え、あ、いや」

「ま、まさか…触ったのか？」

「え、ええと…いや、確かに多少は、見たし、触ったけど…不可抗力というか…僕も必死だったし、感触を楽しんだりは、してない、よ」

いや何言ってるんだ僕。フォローになってねえよ。

「そ、そうか。それでだな、ええと、何の話だったか」

無理やり話を戻そうとするなよ。なんかもう見てられないよ。

こちらはこちらで余裕がないので、乗っからせて貰うが。

「君に『関わるな』と忠告されたのに、僕はまた君に関わった。正直言っても分からないんだ」

さっきは如何にも倒れている所を当然の如く助けたように言ったが、やはり分からないと言うのが本音だ。まるで、僕らしくないと思う。

「…そんな、気まぐれのように関わられるのはひどく迷惑だ。だから、これから先は関わらないと約束するなら見逃してやる。それで良いな」

なんとか調子を取り戻したようで、最初のような傲岸不遜な態度で言う。

僕は、答えを返す。

「いやだ」

「…何？」

自分でも分からない。だけど。

「関わるなって、それで納得できるならさ。また関わったりはしなかったよ。どうしても駄目なんだ。きつとこのまま終わりになんか出来ない」

彼女は呆れたように溜め息をついた。

「まるで要領を得んな。まるで駄々をこねる子供だ。だったらどうするんだ」

「教えて欲しい。吸血鬼のこと。ツエペシュのこと。君のこと。分からないけど、意味があるような気がするんだ」

「お前に吸血鬼のことを事細かに説明してやって、それで私に得があるのか？それが無いなら私が貴様に何か教えてやる理由はない」
もっともな意見だ。言っていることがおかしいのは、明らかに僕だろう。

「君には何の得もないだろう。それでも教えて欲しい。頼む」

そうして頭を下げる。

「…どうしてそこまでするんだ」

僕自身驚いている。自分の中にここまで強い想いがあるなんて思わなかった。

「分からないよ。分からないけど、こんな気持ちを抱えたままじゃ、僕の望む平穏な日常には戻れないんだ。身勝手な、訳の分からないことを言ってるのは分かってる。でも、どうか頼む」

彼女は何も言わない。考え込んでいるようだ。

しばらく間があつて、やがて彼女が口を開いた。

「分かった。良いだろう。ただし、教えるだけだ。それ以上はない」

「…ありがとう。恩に着るよ」

彼女は照れくさそうに、鼻を鳴らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201o/>

Pure Blood Lovers

2010年12月27日23時11分発行